

居場所喪失の経験と目撃が居場所形成に及ぼす影響 — 居場所とは何か, 居場所尺度作成の試み —

Effects of Experience of the Loss of Ibasho and Witness of the Ibasho Loss
— What is the Ibasho, Creation of the Ibasho Scale —

岡崎直哉

中村俊哉

Naoya OKAZAKI

Syunya NAKAMURA

九州大学大学院

福岡教育大学教育心理学講座

(平成30年9月28日受付, 平成30年12月3日受理)

本研究では, 自身が居場所の喪失という経験と他者の居場所の喪失を目撃するという二つの要因がその後の自身の居場所形成にどのように影響していくかを目的に調査を行った。そのためにまずは, 多くの定義づけがされている居場所の概念及び分類を整理を行った。結果として, 居場所は大きく対人関係を必要としない個人的居場所, 少人数の対人関係を求める少人数社会的居場所, 大人数の対人関係を求める大人数社会的居場所に分かれ, 自身の居場所の喪失が少人数社会的居場所と大人数社会的居場所の形成に繋がっていると明らかになった。

キーワード: 居場所, 居場所形成, M-GTA

問題・目的 1

人々にとって居場所はなくてはならないものである。本やメディアにおいても居場所の必要性は多々言われており, 地域社会においても居場所づくりとして数々の取り組みもなされ, 多くの人から重要なものであると考えられている。

居場所があることによって人々は多くの恩恵を得ている。例えば, 石本(2010)では人々の関係のもとに作られる社会的居場所があることによって, 本来感や自己有用感に繋がっていくということが示されている。他にも多くの居場所研究がなされており, 居場所があることによって自身の精神的健康や対人関係など多くの面で良い影響があるということが示唆されている。

居場所の重要性については多くの研究がなされているが, そもそも居場所についてどのように形成していくかというのは想像できるだろうか。

普段の生活の中で, 友達と遊ぶときや, 一人でいるときなど生活の中では, 自身の居場所について考えることはほほないだろう。このように, 居場所とは形成しようとして形成するのではなく, いつの間にか作られているものであるということを考えられるだろう。

想像しがたい居場所の認識や形成について, 北山(1993)は自身の居場所の喪失こそが, 居場所の認識や形成の要因として挙げている。北山は, 「居場所とは, いつも失われてはじめて『ありがたさ』が分かるという類のものなのである」と述べており, もともと居る場所を失うことによって, 今まで居た場所を初めて居場所だと認識し, その後の居場所の形成に影響していくというものである。このように居場所の形成において自身の居場所の喪失というのは大きな役割を果たしているとされている。

北山（1993）の考えに基づくと居場所を認識した人は全員、居場所の喪失を経験したことになるが、自身の居場所喪失の経験だけが居場所の認識や形成にかかわるのだろうか。現在の居場所の研究では居場所の有用性や恋人や友人などのそれぞれの他者による居場所の違いが主な研究動向であり、居場所の認識、形成については研究しているものはない。それにもかかわらず、居場所の認識を居場所の喪失を経験に限定してしまっても良いのだろうか、経験だけではない他の要因から居場所の認識の可能性について探っていく必要がある。

居場所喪失の経験のほかに居場所を認識、形成する要因として、他者の居場所の喪失の目撃が考えられる。例えば、いじめの被害にあった友人の孤立した様子を目撃することで、自分も友人のようになるのではないかと、いつも一緒にいるグループの友人は自分のことをどのように考えているのかと不安に思うことが推察される。このことから自身の今いる場所を大切な場所だと思ひ、そこが失いたくない場所、つまり居場所だと認識する可能性があるのではないだろうか。そしてその認識をきっかけとして、その後他者との関係をどのように築いていくのかまた、どこに居たいかといった居場所形成に影響を及ぼすのではないかと考えられる。

居場所形成について調査をしていく前に、明確にしないといけない問題として、居場所とは何かということがある。居場所と一言でいっても、幅広い意味合いを持つものとなっている。居場所という言葉の定義としては「児童生徒が存在感を実感することができ、精神的に安心していることのできる場所」（文部省、1992）というものや、「自分自身が受け入れられていると感じるところ」（廣井、2000）といったものがあり、心理学だけではなく教育学や臨床などさまざまな分野や研究においてそれぞれに異なった定義がなされている。

このように定義が広く様々に使われている一方で、杉本・庄司（2006）は居場所が多義的で、あいまいなものであると示しているように、明確な定義というものは存在していない。そのため、居場所とは使い勝手が良いが曖昧な言葉となっていることも考えないといけない。

居場所という言葉が曖昧なままでは居場所形成について調査しても結果の解釈に悪い影響を及ぼしてしまう。そのため居場所形成について調べていく前に、居場所とはどのように考えられている

のかということ調べていく必要があるがあるだろう。以上の理由から居場所とは何かということについて調査していく。

調査 1

方法

調査目的 居場所の分類及び概念整理

調査時期 2017年3月から6月

調査対象者 面接に協力してくれた大学生9名（男性4名、女性5名、平均年齢20.44である（表1）。

調査手続き 一人ひとりに半構造化面接を実施した。調査時間は25分から50分であった。

調査内容 主な質問項目に関しては表2に示す。

内容については適宜追加質問を実施し、面接は

表1 調査協力者一覧

	性別	年齢	今の居場所
A	女	21	1人での家
B	女	20	家族、学科、部活
C	女	22	仲のいい友達
D	男	19	自分の部屋、仲のいい友人
E	男	19	家族、部活、仲のいい友人
F	男	21	部活、学科、自分の部屋
G	男	18	地元の友人、部活
H	女	22	仲のいい友達、一人の空間
I	女	21	1人での家

表2 インタビューガイド

- ・ 今のあなたの居場所はどこか
- ・ なぜその場所を居場所だと思うか
- ・ 居場所を失った経験はあるか
- ・ 友だちに居場所がないなと感じたことはあるか
- ・ 居場所を失うことが怖いか

表3 インタビュー内容例

Eさん(19歳、男性) Oはインタビューガイドの項目

発言者	インタビュー内容(一部)
インタビュー O	あなたにとっての居場所とはどういうところをいいますか？
Eさん	自分がいて、落ち着けるところ、肩ひじ張らずにリラックスできる場所
インタビュー A	リラックスできる場所？
Eさん	こんなことなげやとか考えずに、気をつかわなくてもいい場所。家とかですね。
インタビュー A	家ってというのはひとり？
Eさん	家族がいても、ひとりでも
インタビュー A	一人でいられるのは居場所？
Eさん	自分の部屋で一人は居場所。でも、街中でひとりとか、図書館で完全な人ごみとかだと逆に緊張しますね。だから、一人イコール居場所とは思いますが。
インタビュー O	今のあなたの居場所はどこですか？
Eさん	家や、部活、友達いる場所も
インタビュー A	部活や友達で気をつかうことは？
Eさん	もちろんあります。でも、受け入れてくれるから居場所。肩ひじ張らずに済みます。ここにいていいんだという安心できます。
インタビュー A	自分が自分らしくいられるという意味？
Eさん	そういう意味ではないとおもいます。

全て筆者が行った。また、倫理的配慮として、面接を行う前に調査の目的、録音器具の使用といったこれから実施する面接の説明を行い、その後調査協力に関する承諾書の記名をしてもらった。面接は基本表2の質問項目を主とし、適宜質問を行った。今回の研究では先行研究等の居場所感の内容を踏まえ、9名で理論的飽和に至ったと考えられたため、そこまでとした。

分析方法

今回の面接での内容を逐語化し、木下（2003）がグラウンデッド・セオリー・アプローチを活用しやすいように改良した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTAと表記）を用いて居場所の分類及び内容の分析を行った。M-GTAはインタビューデータから概念を生成し、複数の概念間の関係を解釈的にまとめ、最終的に結果図として提示することを目的としている。今回の目的は居場所の分類ごとの尺度の作成のための、居場所の分類の整理を目的としていることから、インタビューによって得られた知見によって概念ごとにまとめていく。そして居場所の分類は行うが、その分類の関係性を見ていく事も必要である。このような本研究の目的もありM-GTAによる分析が妥当であると考えた。

分析の流れとしては、①本研究の分析テーマである「居場所尺度作成のための分類及び項目の収集」を意識しながら逐語化されたデータを読み込んでいき、関連箇所を抽出した。②概念生成においては、分析ワークシートを作成し、概念名、定義、具体例、理論メモを記入した。③データ分析をする中で、順次新たな概念を生成した。④並行して、他の対象者のデータからも具体例を探していった。本研究では2つ以上具体例のあるものを概念とした。⑤生成した概念について、個々の概念同士の関係を検討した。⑥概念同士の関係からなるカテゴリーを生成、分析を行い、結果図に示した。

結果

この分析によって生成された理論を概念とカテゴリーとを用いて説明をしていく。概念を「」, 大カテゴリーを【】, 小カテゴリーを『』で示す。また、表4にカテゴリーと概念を示している。

まず、大カテゴリーについては対人関係を必要としない【個人的居場所】と対人関係を必要とする【社会的居場所】とに分かれた。この二つの大カテゴリーはそれぞれに対極なものであるという

表4 カテゴリー概念図

大カテゴリー	小カテゴリー	概念
個人的居場所	自己の安定	一人で自分の振り返りを行うための居場所 一人で落ち着くための居場所 安全な居場所 自分だけの空間という居場所
	絶対的な場所	物理的な居場所
社会的居場所	肯定的な他者関係	役割的な居場所 安心できる居場所 信頼できる居場所 集団で楽しく過ごすことができる居場所
	自己防衛	周囲から一人でないと思われるための居場所 安全な居場所 排除されないために必要な居場所

ことがいえる。

【個人的居場所】についての小カテゴリーは二つに分かれた。「一人で自分の振り返りを行うための居場所」、「一人で落ち着くための居場所」、「安全な居場所」「自分だけの空間という居場所」といった『自己の安定』, 「物理的な居場所」といった『絶対的な場所』である。自己の精神的な安定を図るために用いられる『自己の安定』と限定的かつ永久的な場所で居場所はなくなるという意味をもつ『絶対的な場所』は居場所に求めることに関連性がみられないため、独立したものと考えられる。

【社会的居場所】についての小カテゴリーとしては二つに分かれた。「役割的な居場所」、「集団で楽しく過ごせる居場所」、「信頼できる居場所」、「他者評価」といった『肯定的な他者関係』。もう一つは「周囲から一人でないと思われるための居場所」、「排除されないために必要な居場所」、「安全な居場所」といった『自己防衛』である。対人関係を楽しいものであると捉えている『肯定的な他者関係』と対人関係を自分を守るための手段として捉える『自己防衛』では【社会的居場所】の中でも正反対の意味を持つものといえる。

また、いくつかの補足の説明を行う。一つ目は【社会的居場所】についてである。インタビューの中で二、三人の仲が良かった人といった少人数集団を想定した場合と、クラスや部活といった大人数集団を想定した人で分かれていた。しかしながら、分けるには明確な差が得られず一つにまとめた方が良いと判断したため調査1では大きく【社会的居場所】とした。また、調査2の居場所形成においては【社会的居場所】の中でも想定していることが違っており居場所形成に差が出ると考えたため、“少人数社会的居場所”と“大人数社会的居場所”に分けている

二つ目に「安全の居場所」である。「安全の居

場所」は【社会的居場所】と【個人的居場所】の両方に存在しているが、【社会的居場所】、【個人的居場所】の両方ともに存在しうる居場所と考えたため、両方に入れている。

問題・目的 2

調査1で居場所とは何かを理解したうえで、本題の居場所喪失経験と目撃が居場所形成に与える影響について調べていく。

調査1の結果から今回設定する居場所を大きく三つに設定する。一つ目は対人関係を必要としない個人的居場所である。そして二つ目は特定の集団や仲のいい友人といった少人数集団から成り立つ社会的少人数居場所、三つ目はサークルや学科といった大人数集団から成り立つ社会的大人数居場所である。社会的居場所については質的な調査では人数による結果までは得られなかったが、仲の良い友人や学科といった少人数と大人数の集団における居場所に求めることの違いをインタビューのなかで感じたため、本研究では社会的居場所を少人数社会的居場所と大人数社会的居場所として分けた。

また、居場所形成について調査していくうえで居場所尺度自体の問題点がある。問題点としては既存の尺度には自己防衛的側面が入っていなかったことである。調査1において居場所には自分を守るためにいるという自己防衛的側面が存在しているということが分かった。今までの居場所研究においては居場所の肯定的な面が多く捉えなれてきたため自己防衛といった面を持つ尺度というものは作られていなかった。

しかし、今回の研究においては居場所形成について調べていくものであり、自己防衛的側面が明らかになったのにもかかわらず、その内容を無視して調査することは妥当なものとは言えないだろう。そのため、居場所尺度の内容に自己防衛的側面を入れなおした尺度の作成を行う必要があると考えたため、調査1のデータを基にして新たに作成することにした。

そして、居場所喪失経験と目撃を問う尺度も存在していなかったため作成を行った。これらの尺度についてもインタビューデータを基にして居場所喪失経験と目撃問う内容の尺度の作成をした。

調査 2

方法

調査目的 居場所喪失の経験と目撃についての居

場所形成の影響について検討する。

調査時期 2017年10月下旬から11月上旬

調査対象者 大学生264名（男性106名、女性158名、平均年齢19.05歳）

調査手続き 大学の講義に質問紙を配布し実施した。

調査内容

1 フェイスシートについての回答。年齢、性別の回答を求める。

2 居場所の有無についての回答。居場所の有無について2件法（はい、いいえ）で回答してもらおう。その後、「はい」と回答した人には場所についての具体例を、いいえと回答した人にはその理由について回答してもらった。

3 個人的居場所尺度への回答。一人である場所（自分の部屋や一人である時間など）が居場所になりうるのかをについて2件法（はい、いいえ）で回答してもらおう。調査1のインタビューから得られた10項目に内容的妥当性を検証するために滝脇・原田（2012）の個人的居場所尺度の2因子から上位2項目ずつ計4項目を追加し『個人的居場所尺度』とした。なお、滝脇・原田（2012）の尺度項目を今回の研究では一部変更して用いている。社会的少人数尺度、大人数社会的居場所尺度でも同じように変更した。そして、「あなたにとって一人である場所がどのような場所なのか当てはまる数字に丸を付けてください。」という教示のもと、各項目について5件法（1：あてはまる～5：あてはまらない）で回答を求めた。

4 社会的少人数居場所尺度への回答。少人数である場所（仲の良い友人など）が居場所になりうるのかについて2件法（はい、いいえ）で回答してもらおう。調査1でインタビューから得られた24項目に内容的妥当性を検討するために滝脇・原田（2012）の社会的居場所尺度における3因子から上位2項目ずつ計6項目を追加し、『社会的少人数居場所尺度』とした。そして、「あなたの考える少人数グループがどのような場所なのか当てはまる数字に丸を付けてください。」と教示し、各項目について、5件法（1：あてはまる～5：あてはまらない）で回答を求めた。

5 社会的大人数居場所尺度への回答。大人数である場所（学科やサークルなど）が居場所になりうるのかを2件法（はい、いいえ）で回答してもらおう。また調査1でインタビューから得られた24項目に内容的妥当性を検討するために滝脇・原田（2012）の社会的居場所尺度における3因子から上位2項目ずつ計6項目を追加し、『社会的

大人数居場所尺度』として、「あなたの考える大人数グループがどのような場所なのか当てはまる数字に丸を付けてください。」と教示し、「各項目について、5件法（1：あてはまる～5：あてはまらない）で回答を求めた。

6 居場所喪失経験尺度への回答。調査1で収集した過去の居場所喪失体験、友人の居場所の喪失の目撃などから項目を作成し、居場所喪失経験尺度（10項目）として4件法（1：ない～4：覚えている）で回答を求めた。

7 居場所喪失目撃尺度への回答。調査1で収集し過去の居場所喪失体験、友人の居場所の喪失の目撃などから項目を作成し、居場所喪失目撃尺度（9項目）とし4件法（1：ない～4：覚えている）で回答を求めた。

なお、社会的少人数居場所尺度と社会的大人数居場所尺度は同じ項目を用いている。研究において区別をするために名前をこのようにつけている。質問紙における項目の順番は変更してある。

各尺度についてはインタビューデータを基に筆者が作成したものを、心理学の教員及び心理学を学ぶ学生6名で内容の妥当性について検討をした。

結果

各尺度の因子分析の結果

個人的居場所尺度

個人的居場所尺度について得られたデータについて因子分析（最尤法, varimax 回転）を行い、因子負荷量を確認した。その結果を表5に示した。第1因子は「誰からも邪魔されずに、一人でのびのびとすきなことができる場所」、「周りの目を気にしなくてもいい場所」など10項目からなる。これらの項目は自分のやりたいことが自由にできる場所という意味を持つ因子が多かったため『自適的居場所』と命名した。第2因子は「自分の振り返りができる場所」、「自分自身のことについて一人で考えることができる場所」など4項目からなる。これらの項目は自身の振り返りに関する意味の因子が多かったため、『内省的居場所』と命名した。信頼性係数としてCronbachの α 係数を用いたところ第一因子は.851、第二因子は.861であり十分な信頼性が確認された。

社会的少人数居場所尺度

社会的少人数居場所尺度について得られたデータについて因子分析（最尤法, varimax 回転）を行い、因子負荷量を確認した。その結果を表6に

表5 個人的居場所尺度

質問項目		因子1	因子2
I	自適的居場所 ($\alpha = .851$)		
12	誰からも邪魔されずに、一人でのびのびとすきなことができる場所		.723
10	周りの目を気にしなくてもいい場所		.669
9	周りに気をつかわなくてもいい場所		.645
14	誰からも危害が加わらず、安心できる場所		.644
7	人から離れて一人でストレスを解消することができる場所		.562
1	落ち着くことができる場所		.556
6	自分にとってのお気に入りの場所		.535
3	自分らしい居場所		.517
13	他人にふみこまれたくない自分の空間という場所		.506
4	嫌なことを忘れ、気持ちを切り替えることができる場所		.424
II	内省的居場所 ($\alpha = .861$)		
5	自分の振り返りができる場所		.835
8	自分自身のことについて一人で考えることができる場所		.792
11	将来のことを一人で考えることができる場所		.684
2	自分自身を一人で見つめることができる場所		.663
因子間相関		因子 I	因子 II
		因子 I	-.738
		因子 II	-

表6 少人数社会的居場所尺度

尺度項目		因子 I	因子 II	因子 III
I	少人数受容的居場所 ($\alpha = .932$)			
21	ありのままの自分をいつも受け入れてくれる場所		.726	
22	肩ひじ張らずに過ごすことができる場所		.697	
14	自分をいつも大切にしてくれる場所		.685	
9	自分の能力をいつも必要としてくれる場所		.677	
3	自分のいいところ悪いところを全ていつも認めてくれる場所		.674	
10	喧嘩をしてもその集団に戻ってくれる場所		.669	
11	自分のすることについても期待してくれる場所		.640	
5	自分のすべてを受け入れてくれる場所		.635	
19	グループの役に立つことができる場所		.618	
20	悩み事を相談できる場所		.582	
13	周りの目を気にしなくてもいい場所		.547	
25	いつでも協力してくれる場所		.521	
4	いつでも一緒にいられる場所		.499	
16	多少口を滑らせても許しあうことができる場所		.471	
7	周りに気を遣うことなく、楽しく過ごせる場所		.462	
II	少人数信頼的居場所 ($\alpha = .919$)			
27	頼ることができる場所		.878	
28	いつでも輪の中に入っている場所		.729	
29	落ち着くことができる場所		.706	
26	いつでも遊びに誘うことができる場所		.668	
30	自分のことを認めてくれる場所		.596	
8	自分のことを受け入れてくれる場所		.574	
18	一緒にいて楽しいと思える場所		.519	
1	自分らしい居場所		.504	
17	グループの中で一人ではないと感じることができる場所		.472	
III	少人数保守的居場所 ($\alpha = .719$)			
21	中心人物に同調し、仲間外れにされないよう努力する場所			.785
23	集団の関係を壊さないように努力する場所			.669
24	自分の意見を言うことのできない場所			.568
2	素直は違う自分で後している場所			.486
15	自分のしたことについていつも良い評価をしてくれる場所			.446
6	周りに一人ぼっちと思われなくてすむ場所			.368
因子間相関		因子 I	因子 II	因子 III
		因子 I	.682	-.163
		因子 II	-	.836
		因子 III	-	-

示した。第1因子は「ありのままの自分をいつも受け入れてくれる場所」、「肩ひじ張らずに過ごすことができる場所」など15項目からなる。これらの項目は集団によって認められたり、大切にされたりと受け入れられるという内容が多いため『少人数受容的居場所』と命名した。第2因子は「頼ることができる場所」、「自分のことを認め

てくれる場所」など9項目からなる。これらの項目は人に頼ったり、認めてもらったりという人との信頼関係を示す内容の因子が多かったため、第2因子を『少数信頼的居場所』と命名した。第3因子は「中心人物に同調し、仲間外れにされないよう努力する場所」、「集団の関係を崩さないよう努力する場所」など6項目からなる。これらの項目は集団から外されないようにするという意味を持つ因子が多かったため、第3因子を『少数保守的居場所』と命名した。第信頼性係数としてCronbachの α 係数を用いたところ第1因子は.932、第2因子は.919、第3因子は.719であり十分な信頼性が確認された。

大人数社会的居場所

社会的な大人数居場所尺度について得られたデータについて因子分析(最尤法, varimax 回転)を行い、因子負荷量を確認した。その結果を表7に示した。第1因子は「自分のすべてを受け入れてくれる場所」、「自分の良いところも悪いところもすべて認めてくれる場所」など20項目からなる。

これらの項目は集団によって認められたり、大切にされたりと受け入れられるという内容が多いため『大人数受容的居場所』と命名した。第2因

表7 大人数社会的居場所尺度

尺度項目	因子I	因子II	因子III
I 大人数受容的居場所 ($\alpha = .973$)			
26 自分のすべてを受け入れてくれる場所	.859		
27 自分の良いところも悪いところもすべて認めてくれる場所	.830		
28 いつでも輪の中に入れてくれる場所	.787		
21 悩み事を相談できる場所	.785		
29 多少口を滑らせても許しあうことができる場所	.771		
22 自分らしいられる場所	.757		
25 周りに気を遣うことなく、楽しく過ごせる場所	.755		
13 いつでも協力してくれる場所	.752		
19 ありのままの自分をも受け入れてくれる場所	.744		
8 いつでも遊びに誘うことができる場所	.709		
7 いつでも一緒にいられる場所	.698		
5 落ち着くことができる場所	.698		
14 頼ることができる場所	.688		
30 グループの中で一人ではないと感じることができる場所	.681		
18 喧嘩をしてもその集団に属してこれる場所	.668		
23 自分のことを認めてくれる場所	.657		
10 周りを気にしなくていい場所	.644		
12 自分をいつも大切にしてくれる場所	.624		
4 肩ひじ張らずに過ごすことができる場所	.604		
20 自分したことについていつも良い評価してくれる場所	.587		
II 大人数役割的居場所 ($\alpha = .901$)			
3 グループの役に立つことができる場所		.715	
1 自分のことを受け入れてくれる場所		.607	
2 一緒にいて楽しいと思える場所		.606	
6 自分の能力をいつも必要としてくれる場所		.597	
24 自分のすることについていつも期待してくれる場所		.597	
III 大人数保守的居場所 ($\alpha = .723$)			
9 中心人物に同調し、仲間外れにされないよう努力する場所			.716
11 自分の意見を言うことのできない場所			.665
16 集団の関係を崩さないよう努力する場所			.630
17 素とは違う自分で接している場所			.559
15 周りから一人ぼっちに思われずに済む場所			.350
因子間相関	因子I	因子II	因子III
	因子I	-.498	-.166
	因子II		-.967
	因子III		

子は「グループの役に立つことができる場所」、「自分の能力をいつも必要としてくれる場所」など5項目からなる。これらの項目はグループの役に立つという意味の因子が多かったため、第2因子を『大人数役割的居場所』と命名した。第3因子は「中心人物に同調し、仲間外れにされないよう努力する場所」、「自分の意見を言うことのできない場所」など5項目からなる。これらの項目は集団から外されないようにするという意味を持つ因子が多かったため、第3因子を『大人数保守的居場所』と命名した。信頼性係数としてCronbachの α 係数を用いたところ第1因子は.973、第2因子は.901、第3因子は.723であり十分な信頼性が確認された。

居場所喪失経験尺度

居場所喪失経験尺度について得られたデータについて因子分析(最尤法, varimax 回転)を行い、因子負荷量を確認した。その結果を表8に示

表8 居場所喪失経験尺度

尺度項目	因子I
I 居場所喪失経験 ($\alpha = .779$)	
5 グループから仲間外れにされる	.731
4 友人から必要とされなくなる	.706
7 友人たちが会話をしている中に入れない	.679
10 友人が自分の陰口をいっている	.633
9 グループでの遊びに誘われない	.629
1 親が自分のことを構ってくれない	.395
6 友人と喧嘩をする	.372
2 友人が別の友人と遊んでいる	.362
3 進学やクラス替えによって、仲のいい友人と離れる	.345
8 喧嘩などが原因で家族から無視される	.280

表9 居場所喪失目撃尺度

尺度項目	因子I
I 居場所喪失目撃 ($\alpha = .888$)	
6 グループになじめていない人を目撃する	.731
7 仲間外れにされている人を目撃する	.706
8 クラス替えや進学でなじめていない人を目撃する	.679
5 友だち同士で喧嘩をしている人を目撃する	.633
4 一人で行動をしている人を目撃する	.629
2 友人がほかの友人の陰口を言っている様子を目撃する	.395
9 みんなから無視されている様子を目撃する	.372
1 いじめなどをうけている様子を目撃する	.362
3 転校生がなじめていない様子を目撃する	.345

表10 各下位尺度の平均値, SD, α 係数

	平均値	SD	α 係数
個人的居場所尺度			
自適的居場所	1.47	0.56	.851
内省的居場所	1.69	0.81	.861
少数社会的居場所			
少数受容的居場所	2.04	0.73	.932
少数信頼的居場所	1.63	0.67	.919
少数保守的居場所	3.26	0.79	.719
大人数社会的居場所			
大人数受容的居場所	2.38	1.00	.973
大人数役割的居場所	2.14	0.93	.901
大人数保守的居場所	3.13	0.91	.723
居場所喪失経験尺度	2.14	0.50	.779
居場所喪失目撃尺度	2.60	0.68	.888

した。

居場所喪失経験という一つの括りで考えるため、1因子になるように設定し、因子名は『居場所喪失経験』とした。信頼性係数としてCronbachの α 係数を用いたところ第1因子は.779となり、十分な信頼性が確認された。

居場所喪失目撃尺度

居場所喪失目撃尺度について得られたデータについて因子分析（最尤法, varimax 回転）を行い、因子負荷量を確認した。居場所喪失目撃という一つの括りで考えるため、1因子になるように設定し、因子名は『居場所喪失目撃』とした。信頼性係数としてCronbachの α 係数を用いたところ第1因子は.888となり、十分な信頼性が確認された。

最後にすべての尺度について、項目平均値を各尺度得点とした。それぞれの尺度得点を及び、標準偏差 (SD), 信頼性係数 (α 係数) を算出し、表 10 に示した。

本研究の回答者に居場所の有無と主な居場所について回答をしてもらった。回答者数 264 名に

対して「居場所がある」と回答した人は 263 名、「居場所がない」と回答した人は 1 名だった。主な居場所については自宅, 実家, 一人部屋などの「家」と回答した人が一番多く、「友人」, 「家族」, 「バイト」, 「部活」, 「恋人」などの回答があった。

また、測定した三つの居場所についてもそれぞれが居場所になりうるのかを回答してもらった。個人的居場所については居場所であると回答した人は 249 名、ないと回答した人は 14 名であった。少人数社会的居場所については居場所であると回答した人は 258 名、ないと回答した人は 5 名であった。大人数社会的居場所については居場所があると回答した人は 238 名、ないと回答した人は 25 名であった。

居場所喪失経験と居場所喪失目撃が居場所形成にどのように影響を及ぼすのかを調査するために重回帰分析を行った。説明変数として居場所喪失経験尺度, 居場所喪失目撃尺度, 目的変数として個人的居場所尺度の 2 因子, 社会的少人数居場所の 3 因子, 社会的大人数居場所の 3 因子をそれぞれ投入した。それぞれの結果を表 11, 12, 13 に示した。

表 11 個人的居場所尺度の各下位尺度別の重回帰分析

説明変数	自適的居場所			内省的居場所		
	B	SEB	β	B	SEB	β
居場所喪失経験	.052	.082	.046	.143	.119	.088
居場所喪失目撃	-.035	.060	-.043	-.106	.088	-.088
R^2	.002			.008		

* $p < .10$, ** $p < .05$, *** $p < .01$

表 12 少人数社会的居場所尺度の各下位尺度別の重回帰分析

説明変数	少人数受容的居場所			少人数信賴的居場所			少人数保守的居場所		
	B	SEB	β	B	SEB	β	B	SEB	β
居場所喪失経験	.329	.104	.225 ***	.341	.096	.254 ***	.010	.116	.006
居場所喪失目撃	.054	.076	.051	-.042	.070	-.043	.104	.085	.089
R^2	.065 ***			.055 ***			.009		

* $p < .10$, ** $p < .05$, *** $p < .01$

表 13 大人数社会的居場所尺度の各下位尺度別の重回帰分析

説明変数	大人数受容的居場所			大人数役割的居場所			大人数保守的居場所		
	B	SEB	β	B	SEB	β	B	SEB	β
居場所喪失経験	.289	.144	.145 **	.233	.135	.125 *	-.077	.132	-.043
居場所喪失目撃	.164	.105	.113	.060	.100	.044	-.016	.097	-.012
R^2	.051 ***			.023 **			.003		

* $p < .10$, ** $p < .05$, *** $p < .01$

社会的少数居場所尺度では居場所喪失経験から少数受容的居場所、少数信頼的居場所に対する標準偏回帰係数 (β) が有意であった。一方で居場所喪失目撃から少数受容的居場所、少数信頼的居場所とも標準偏回帰係数は有意ではなかった。また、少数保守的居場所にはどちらとも有意ではなかった。

大人数社会的居場所尺度では居場所喪失経験から大人数受容的居場所、大人数役割的居場所に対する標準偏回帰係数 (β) が有意であった。一方で居場所喪失目撃から大人数受容的居場所、大人数役割的居場所とも標準偏回帰係数は有意ではなかった。また、大人数保守的居場所にはどちらとも個人的居場所においては居場所喪失経験と居場所喪失目撃ともに有意でなかった。

考察

調査1における考察

これまでの研究において居場所の定義が乱立しており明確なものがなかったため、居場所の分類と概念整理を行った。その結果居場所は大きく人間関係を必要とする社会的居場所と人間関係を必要としない個人的居場所に分かれた。

個人的居場所、社会的居場所ともに様々な意味を持つ居場所が現れ整理をしたが、大きく分けると個人的居場所は自身の精神的な安定、社会的居場所は自身の周辺環境の向上という意味合いを持つだろう。個人的居場所については一人で自分自身の言動を振り返ったり、ゆっくりしたりと自分が自分であるために必要という意味合いのものであった。一方、社会的居場所については肯定的・自己防衛的な人間関係という違う意味合いの居場所ではあった。

個人的居場所は内的なもの、社会的居場所は外的なものであったといえると考えられるが、共通することは自分が集団でよりよく過ごせるということであったと考えられる。

今回の研究から、個人的居場所と社会的居場所は相互的な関係性を持つのではないかと予想することができる。統計的な分析を行っていないため、明確には言うことができない。しかし、インタビューの中では二つの居場所の関連性を示唆する発言も出た。そのため、今後は居場所同士の関係性を見ていく事が必要となってくるだろう。

調査2における考察

調査2では居場所喪失経験と目撃が居場所形成に及ぼす影響について調査した。また、尺度など

を作り直す必要があったため調査1の結果を基に新たに個人的居場所尺度、社会的居場所尺度を作成した。

重回帰分析の結果、居場所喪失経験があることによって少数集団での受容的、信頼的居場所と大人数集団での受容的、役割的居場所の形成に繋がっていくことが明らかとなった。このことから北山(1993)が居場所が失われてから初めて気づくものといったように、居場所形成に対し自身の居場所の喪失ということが必要となるということができよう。しかしながら、重回帰分析の説明率がすべて低かったこともあり、今後さらなる調査が必要となってくるだろう。

また、居場所喪失目撃については全ての居場所に対して有意な影響が見られなかった。そのため、居場所形成においては他者の居場所の喪失を目撃は居場所形成においてあまり重要な意味を持たず、自身の居場所の喪失というものが重要なものとなるということが示されることとなった。

居場所喪失目撃が居場所形成に影響を及ぼさなかった理由としては過去の記憶として印象に残りにくい問題がある。調査1のインタビューにおいて、自身の喪失経験についての話は詳しく話すことができている一方、目撃についてはあったこと自体は覚えているがその時の感情などについては話すことができなかった。このことから、目撃は経験と違い記憶に鮮明に残りにくくそのため過去の目撃と居場所形成がうまく結びつかなかったということが考えられる。

しかし、居場所喪失目撃については有意ではなかったが、個人的居場所に対して負の影響が見られた。居場所喪失目撃が居場所形成に繋がるということを行うことは出来ないが、社会的な居場所との形成の違いとして注目していく価値はあるだろう。

また、少数社会的居場所尺度と大人数社会的居場所では「信頼」と「役割」といった居場所における違う側面があることが示された。少数集団においては人との関わりが密になりやすく、その中で信頼関係を作っていく事ができる。一方、大人数集団においては人との関わりが密にはなり難しく、集団にいてもいなくても良い存在になりやすいと考えられる。そのため、その場所に自分がいる意義を見出すために自分にしかできないし役割というものがあることで、集団から認められていると感じ居場所になり得るのではないかと考えられる。

このように、社会的居場所については人数など

によってその居場所に求められる、求めるものが変わってくるだろう。今回は大人数、少人数という大雑把な枠組みで考えたが親、恋人などまた違った意味の居場所として作られていくだろう。一つ一つを細かく見ていく事は難しいが、今後の研究においてはどのような集団の場所を居場所と想定しているのかということを確認にしていけることが必要となっていくだろう。

今後の展望

本研究の課題としては居場所という範囲の広さがある。今回は個人的居場所、少人数社会的居場所、大人数社会的居場所と分けたが杉本・庄司(2006)が述べるように居場所とは曖昧で多義的なものであると言ったようにもっと詳しく分けていくことが出来ると考えられる。特に本調査から場所や時期を限定することによって、違った結果が見えてくる可能性があげられる。

特に年齢による違いについて今後考えていかなければならない。インタビュー調査の中でも居場所形成について小学生の時の話をする人もいれば、現在の話をする人もいた。西中・石本(2014)においても発達段階における居場所づくりの差異の検討の必要性を述べている。年齢における居場所形成の違いや居場所の意味合いについても今後検討していく必要がある。

謝辞

論文を書き終えるにあたり様々なアドバイスをくださった教育心理学講座の学生の皆様、インタビュー調査や質問紙調査に協力してくださった大学生の皆様に心より感謝いたします。

〈引用文献〉

- 石本雄馬(2010). 心の居場所としての個人的居場所と社会的居場所—精神的健康および本来館、自己有用感との関連から—カウンセリング研究, 43, 72-78.
- 北山修(1993). 自分と居場所 岩崎学術出版社
- 木下康仁(2007). ライブ講義 M-GTA —実践的質的研究法— 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂
- 杉本希映・庄司一子(2006). 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化 教育心理学研究, 54, 289-299.
- 滝脇裕哉・原田克巳(2012). 居場所尺度の作成 日本教育心理学会第54回総会, 471.
- 西中華子・石本雄馬(2014). 小学生の適応を高める要因の検討—居場所感の観点から—日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 169.
- 廣井いずみ(2000). 「居場所」という視点からの非行事例理解 心理臨床学研究, 18, 129-138.
- 文部省(1992). 学校不適応対策調査研究協力者会議 「登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の『心の居場所』づくりをめざして—(報告)」.

